

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
大学院学生研究
2019年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	社会学	研究科	社会学	専攻
研究代表者 (2020年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年・学生番号		氏名		
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 2年 (学生番号: 18SB002J)		吉田 静 印		
指導教員	所属部局・職		氏名		
	社会学部・准教授		小倉 康嗣 印		
自然・人文・社会の別	自然	・	人文	・	<input type="checkbox"/> 社会
			個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人	・ 共同 名
研究課題	漁船漁業の近代化と困難の経験史：三陸の突棒漁に従事してきた漁師のライフストーリー				
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2020年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名		
	社会学研究科社会学専攻博士後期課程2年		吉田 静		
研究期間	2019 年度				
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 129,863 円 / (採択金額) 130,000 円				

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

日本の漁業は高度経済成長のなかで大きく発展した一方で、設備投資競争により負債を抱えるものも現れ、水産資源管理のため漁獲規制も厳しくなった。先行研究では、日本の社会状況の変容に伴って生じた漁法・漁業技術や生業活動の変化を記述しているが、この変化自体が漁師にとっていかなる経験かについて焦点化されていない。だが、「獲る」漁業の問題点を理解し、今後の「獲る」漁業を展望するためには漁師の経験に注目する必要があるだろう。そこで本研究では、かつては盛んに行われていたが、現在では従事者が減少した岩手県上閉伊郡大槌町の突棒漁に着目し、突棒漁の近代化と突棒漁師が直面してきた困難の経験を明らかにすることを目的とした。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 漁師 } { 突棒漁 } { 漁業の近代化 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

漁業が近代化していくなかで、大槌町の突棒漁師が直面してきた困難の経験を明らかにするという本研究の目的のために、本年度はまず漁師Aさんのライフストーリーを検討することとした。1934年に漁師の家に生まれたAさんは、中学卒業後すぐに大槌周辺のさまざまな船に雇われながら漁を学んだ。そして1960年代後半からは千葉県のある漁船会社に雇われることになり、突棒漁やサバ漁などに従事する。平成に入り会社を退職し自分の船を買って突棒漁やイカ釣りをしてきたが、この船は東日本大震災で流れてしまい、現在は震災後に買った中古の船で漁を続けている。

彼が突棒漁を続けていることについて「好きだの(が)、もお先だのよ。何も金儲かる訳でねえ」と語る、その語り口に心を惹かれて調査を続けてきたが、これまでの調査ではAさんが長年従事していたサバ漁の経験についてはあまり話を聞くことができていなかった。このサバ漁は砕いたイワシを撒き餌とし「海が、もお腐っちゃう」ような方法で行われていた。最終的には値の安い種類のサバすら獲ることが難しくなり、当時「花形」と言われていた北洋サケマス漁よりも儲かるほどだったサバ漁に従事していた漁業者は、廃業に追い込まれたりしていったという。先述のように、Aさんは長年漁師であり続けてきたが、漁船会社に雇われ漁撈長を務めている間、多くの期間、サバ漁(一本釣り・タモすくい)に従事していた。そのため、漁業が近代化していくなかでこのように苦々しくもあったサバ漁の経験を踏まえずには、Aさんにとっての突棒漁を続ける意味を理解することはできないと考え、2019年6月にフィールドワーク調査を行った。

6月に行ったこのインタビューのなかで、Aさんはあまり収益のあげられる漁ではなくなり従事者が大幅に減った突棒漁について「この商売〔突棒漁〕をなくしねえように、頑張っていくべし」と漁師仲間と話していたということをお話してくれた。その一方で、Aさん自身の経験は昭和の時代の話だと述べ、漁業がどんどん近代化・テクノロジー化してきた現在との違いを説明し、「だからあ、われわれの時代と今とは全く違うって。…これは、昔の話ですよと書いとけばいいんだ」と語ったことが印象的であった。

この調査も踏まえ、論文「近代化する漁業における漁師の揺らぎと誇り——突棒漁をやめられない漁師のライフストーリー」(『語りの地平』(4):3-24ページ、2019年)を執筆した。この論文では、Aさんのライフストーリーを通じて、漁業が近代化していくなかで突棒漁を続けることの意味を考察することを目的とした。

「赤字覚悟でやるような」漁で「何も金儲かる訳でねえ」と語られることから分かるように、現在Aさんにとって突棒漁は「副次的ですらないような経済的意味しか与えられていない生業活動」であり、松井健はこれを「マイナー・サブシステム」と呼んだ(松井健「マイナー・サブシステムの世界——民俗世界における労働・自然・身体」篠原徹編『民俗の技術』朝倉書店、247-68ページ、1998a年)。この「マイナー・サブシステム」については、安室知がよりも積極的に評価する意味で「遊び仕事」と名づけるなど(安室知『日本民俗生業論』慶友社、2012年)、呼び方に違いはあれど、これまでの研究で議論されてきた。

これらの研究では、経済性がそれほど高くない生業活動の「面白さ」や「楽しさ」という性格が指摘されてきた(菅豊「深い遊び——マイナー・サブシステムの伝承論」篠原徹(編)『民俗の技術』朝倉書店:217-46ページ、1998年や安室知『「遊び仕事」と『まごつき仕事』——『小さな生業』にみる自然と人の調和』『現代農業』2006年8月増刊号、140-7ページ、2006年など)。他方で、松井健は、「遊びを特徴づける興奮や歓びが、多くのマイナー・サブシステムに認められるにしても、それでマイナー・サブシステムの重要性のすべての側面を明らかにすることができたとはいえない」と述べ、マイナー・サブシステムの楽しみは賭博性にむすびつくものではなく、「成果を確実にしていくための技法の習得」が要求されるもので、マイナー・サブシステムの成果は「誇りの源泉」になっていると指摘している(松井健『文化学からの脱構築——琉球弧からの視座』榕樹書林、1998b年)。そこで本論文では、この松井の議論を踏まえながら、「好きだの(が)、もお先だのよ」と語る漁師Aさんにとって突棒漁を続けていることの意味を考察していった。

漁に出ることが「ちいせいときっから、もう、好きだったんだべ」と回想するAさんは、中学校卒業後、進学を進める周囲の声をよそに「おれは漁師だから、漁師になる」という言葉通り漁師になった。漁の責任者である漁撈長も20歳のうちから務めていたという。急遽、北洋サケマス漁で初めて漁撈長を務めることになった際に船を大漁にして港に戻り、その後すぐに千葉県の会社にサケマスの漁撈長と呼ばれた。千葉県の会社に雇われるようになってからは、最初の数年は突棒漁を、その後はサバ漁を主にしながら、長年漁撈長を務め続けた。この漁撈長は漁師であれば誰でもなれるものではなく、漁を上げることができなければすぐに解雇されてしまうものであるという。Aさんは、このことについて「腕がなくては。度胸もねえばだめだ」と語り、海も他の乗組員も怖がっているのは漁も漁撈長を務めることもできないと説明する。

Aさんはまた、現在の漁と「われわれの時代」の漁の違いを語る。例えば、船をリモコンでできるようになるなど船が高性能化するまでは、突棒漁は10人以上の乗組員を必要とする漁であった。そのような時代には、「船立ち」という船での立ち方といった基本から漁を学んでいったと振り返る。そして、Aさんには船立ちを学び、足元に力を入れて銚を構えて投げる姿のほうが「格好がいい」という価値観があることが分かった。こ

研究成果の概要 つづき

のような時代に応じた漁の違いは、突棒漁だけでなくサバ漁などの他の漁でも語られた。Aさんが第一線にいた時代には、漁獲を上げるために経験に裏付けられた勘や技量が重要なことであったが、漁に用いられる機械が高性能化していくなかで機械を使いこなせる頭の良さが必要になっていることを、自身を含め「学校さも入んねえ人」と呼び対比して説明する。そして、漁業が近代化していくなかで、漁撈長に求められるものが、昭和のAさんらの時代には「なんでも勘」であったが、今は「頭の問題」だと語った。

本論文では結論として、経済的な意味をあまりもたないマイナー・サブシステムを行うことの意味についての「誇りの源泉」(松井、前掲書、1998b年)の議論を踏まえつつ、Aさんの長い漁師人生のなかで漁師として身を立ててきたという「誇り」を想起させるものであるために、突棒漁を続けているのだと結論づけた。Aさんは突棒漁をやめられないことを「好き」という言葉で説明するが、Aさんにとって漁を「好き」ということが、自身を漁師になることに導き、人よりも早く技量や度胸を身に付けることにもつながっていた。つまり、単なる嗜好性の問題ではなく、廃業していく人びとを目にしながらかも、自身は長い間漁師として身を立てる続けることができたという「誇り」を抱いているために突棒漁を続けていると考えた。

だが、漁業が近代化してAさん自身がある意味過去に取り残されつつあることを自虐的に語りつつも、かつての漁師仲間と「この商売〔突棒漁〕をなくしねえように、頑張っていくべし」と言いあっていたことについて、この結論では十分に考察されたとは言えない。本論文ではAさんにとっての突棒漁を続けている意味を考察したが、研究計画で示した本研究の目的である漁師の困難の経験をより深い次元で理解するために問うべきだったのは、Aさんが自身の(困難を含めた)経験を通して突棒漁を続けていくことに対しどのような意味を生成しているのかということではないかと、その後のゼミでの議論や先行研究の検討のなかで気づかされた。

アフリカの狩猟採集民グイ/ガナを研究する菅原和孝は「グイの男たちは狩りに行きたいから行く」(『狩り狩られる経験の現象学——ブッシュマンの感応と変身』京都大学学術出版会、2015年)と述べる。本研究でも、このように突棒漁を続ける理由を「やりたいから」という素朴なものに留めておくことで、「獲る」漁業の困難が個々の漁師にとっていかなる経験であったかという問いについて、「翻訳的適応」(前川啓治『開発の人類学——文化接合から翻訳的適応へ』新曜社、2000年)でも「日常抵抗論」(松田素二『抵抗する都市——ナイロビ移民の世界から』岩波書店、1999年)でもない論じ方で考察を深めることができるのではないかと考えた。単に突棒漁を続けていることの理由を明らかにするだけでは、困難な状況に直面しつつもその人なりの方法で対応しているものとして見なすような結果論的な理解にとどまってしまう。「やりたい」という意志やこだわりを素朴に受け止めながら、それと共存するAさんの自虐的な語り口にも目を向けていく必要がある。

この点において考察を進めるために、「ポスト・ユートピア」(石塚道子・田沼幸子・富山一郎編『ポスト・ユートピアの人類学』人文書院、2008年)の議論への理解を深めた。田沼幸子は、「日常的抵抗論」とそれに対する浜本満の批判を検討し、ユートピア小説を手がかりとして「ソ連崩壊後の『平和時の非常期間』という矛盾に満ちた『社会主義』生活に関するキューバの民族誌を、希望としてでも、アイロニーとしてでもなく、アイロニカルな希望として書くための構えができた」と述べる(「ユートピア小説と民族誌——人類学における抵抗論と反=抵抗論を越えて」若手研究集合『人文学討議空間のデザインと創出』:35-53ページ、2007年)。

田沼にとってポスト・ユートピアのアイロニーとは、ポストモダンのシニシズムとは区別されるべきものである(田沼幸子『革命キューバの民族誌——非常な日常を生きる人びと』人文書院、2014年)。田沼はキューバ人のアイロニーを分析することを通じて、このアイロニーを単にポストモダンのシニシズムのようにキューバ政府に対する批判や皮肉として受け取るのではなく、そのなかに「親しみを交えた視線」を見出し、「批判と同情の入り交じった」アンビバレントな感情の表出として捉えようとする(田沼、前掲書)。そして、キューバの人びとは、現状以外の「オルタナティブな希望が欠如しているため、アイロニー以外に語りようがない」が、アイロニーを語ることで革命の理想への希望も示していると論じた。田沼の「アイロニカルな希望」は、かつて社会主義革命の理想を信じた人びとのアンビバレントな感情について論じたものであり、そのまま本研究に適用することはできないが、ある種自虐的でもある語り口を考察に加える本研究にとって示唆深い。

そこでさらに、田沼のアイロニー議論とも重なる点のある、ニーチェによって提起された「受動的ニヒリズム」と「能動的ニヒリズム」の区別が参考にしたいと考えた。今田高俊はこの区別に言及しながら、環境への適応は「単なる反応と受動の産物」であると、「新たな意味を生成し続ける営みこそ、人間ほんらいの能動性であり、『生』そのものである」と述べる(今田高俊『意味の文明学序説——その先の近代』東京大学出版会、2001年)。Aさんの自虐的な語り口も、文字通り受け取るならば自身の価値観を過去のものとして否定しているように見なせるが、そこには単なる否定だけではない愛着をもったニュアンスも垣間見えた。上記の概念の検討を通して、このようなアンビバレントな意味づけを含めAさんが突棒漁を続けることに対してどのような意味を生成しているのかを問うことは漁師の経験を深く理解するために必要だということが分かった。

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文 (研究所紀要 : 査読あり)

・吉田 静, 2019, 「近代化する漁業における漁師の揺らぎと誇り——突棒漁をやめられない漁師のライフストーリー」『語りの地平』(4) (日本ライフストーリー研究所) : 3-24.

④ 研究会発表

・「漁の近代化と伝統漁業を続ける後ろめたさ——突棒漁をやめられない漁師のライフストーリー」、ライフストーリー研究所 第5回夏期研究集会、日本ライフストーリー研究所、2019年8月31日(土)